身近に感じる男女差別

上野原市立秋山中学校三年　　杉本　愛莉

あなたはどんなときに男女差別を感じますか。考えてみればみるほど、世の中は男女差別であふれかえっていると感じます。

私の祖父母は、よく「女の子なんだから、料理はできないとダメ。」や「男は外で働くのだから家事は女の子がするものだ。」などと言ってきます。ですが、兄や弟には何も言わないのです。

「イクメン」という言葉を聞いたことがありますか。「イクメン」とは、育児をするメンズ、すなわち子育てを積極的に行う父親を指します。私はこの言葉があまり好きではありません。なぜ父親は自分の子供を世話するという当たり前のことを行っただけで評価されるのでしょうか。なぜ母親を同じように評価する言葉は存在しないのでしょうか。それは、父親が働き、母親が子育てをするという固定観念があるからです。そのような家庭を否定するわけではありません。ですが、今は共働きの家庭も少なくありません。自分の子供を育てるというのは当たり前であり、父親だけを称えるのは間違っていると思います。

女性が差別されているのはこのようなことだけではありません。例えば、会社での男女比です。会社では、男性が優先的に採用されているのではないでしょうか。もちろん、職種や職業によりますが、定年まで働くのも、出世をするのも男性の方が優位です。

では、男性差別に視点を当ててみてはどうでしょうか。女性だけでなく、男性だって差別はされているのです。

セクハラや暴力は、女性が男性から受けるものだと思っていませんか。確かに、ニュースで取り上げられるセクハラや家庭内暴力は男性がしてしまったものがほとんどです。ですが、女性が男性にセクハラや暴力をしていることもあるはずです。しかし、あまり問題視されていないように感じます。また、女性には痴漢から逃れるための女性専用車両が設けられているのに、男性が痴漢冤罪から逃れるための男性専用車両は、どんなに必要性が訴えられても設けられていません。それで、男性が電車に乗る際には、つり革を両手で掴むなど、気を遣わなければ痴漢をしていない証明ができないのです。

男女平等な世の中にしていくためにはどうすれば良いのでしょうか。まずは、根本的な考え方を変えていく必要があります。そもそも日本では女性のバスの

運転手や男性の主夫をしている人が少ないため、「男性は外で働き、女性は家事や育児をする」などといった固定観念が無くならないのです。男性の女性へ対する痴漢ばかりをニュースで取り上げるから、男性へのそういったイメージが強くなり、冤罪をかけられてしまうのです。このような偏った考えをなくし、改めていくためにも、男女平等のための活動をテレビやラジオで宣伝したり、より多くの知識を得ることが大切だと思います。少しずつ、男女差別に対する理解を深め、男女平等の世の中へしていけたら良いと思います。

いつまでも「女性らしさ」「男性らしさ」にとらわれているのは、現代にふさわしくないと思います。

女性が口を大きく開けて大声で笑ったり、足を広げたりするのは下品とされ、「女の子なんだから上品にしなさい」と注意されます。学生の時は、校則でメイクはしてはいけないとされていたのに、社会人になると、メイクはマナーに変わります。逆に、男性がメイクをすると、「男なのにおかしい」と批判されます。失敗を恐れたり、何かを怖がっただけなのに「男らしくない」「男なのに情けない」と言われます。これはおかしいと思いませんか。このようなことを言われ、自分を偽ってしまう人がいるのも事実です。

昔からの考えや風潮が、必ずしも正しいとは限りません。その考え方に縛られ、他人を否定したり、傷つけてしまったりするくらいなら、それぞれの時代に合わせて、考え方は変化させていくべきだと思います。女性はこうあるべきである、男性はこうあるべきであるなどと、性別でその人の在り方を決めつけるのはもう時代遅れです。今は、一人ひとりの個性を互いに認め合い、受け入れていく時代です。まさに私もそう思います。男性も女性も個人として尊重されなければならないのです。先日の公民の授業でも、憲法第二十四条両性の本質的平等について考えました。世の中の人の考え方をすぐに変えていくことは難しいかもしれません。仮に、理解できなかったり、受け入れることができなかったりしても、その人を否定することだけは、絶対にしてはいけません。

すべての人が過ごしやすい男女平等な世の中になることを願いながら、そんな未来のために、これから私たちができることを探して行動していきたいです。